令和６年～７年度 新潟県・新潟市小学校教育研究会指定研究（２年次）
新発田市立七葉小学校授業研究会 活動記録

1 基本情報

（１）研究主題：自分を、みんなを大切にして、共に伸びようとする児童の育成
～対話を通して自分や他者と向き合い、
互いに尊重し合う態度と実践力を育てる～

（２）教科：総合的な学習の時間（人権教育、同和教育）

（３）期日：令和７年１１月２１日（金）

（４）会場：新発田市立七葉小学校

2 研究の概要

当校はすべての教育活動の根幹に人権教育、同和教育の視点を取り入れており、「笑顔あふれる七葉」の合い言葉に向かって取組を進めている。その中でも、教育活動の軸として人権学習「きずな」の時間を設定し、小学校６年間を通して人権感覚を磨けるように、児童の発達段階に合わせてカリキュラムを構成している。

１年次の研究では、対話的な学習を通して人権教育、同和教育の研究を進めてきた。その結果、児童が自分について話したり、今後の自分が目指す生き方について話したりする姿を多く見ることができた。しかし、児童間で互いの考えや意見に対しての受け止めや思いについて、自らの気持ちや考えを本音で語り合う姿については課題が残った。そこで、２年次は児童がより本音で語り合うために、「単元構成、授業展開の工夫」、「主発問、問い返しの発問の工夫」について研究を進めた。

「単元構成、授業展開の工夫」では、「人との出会いから学ぶ」ことを大切にした単元を意図的、計画的に設定した。資料に留まらず、現実にあるものとして差別事象を捉えさせ、被差別者への共感や差別への憤りをもたせた。そして、体験活動等を通して、様々な思いや生き方があることを知り、児童が新たな視点を獲得したり、自己の生き方に生かしたりできるように単元や授業展開を工夫した。

「主発問、問い返しの発問の工夫」では、主発問を「共感的発問」、「分析的発問」、「投影的発問」、「選択的発問」「批判的発問」に分類し、児童の思いや発達段階に合わせて設定した。さらに、児童の本音をより引き出せるように教師が問い返しを行った。この問い返しについては、児童の発言に対して教師の問い返す言葉、タイミングなどを事前に想定し、研究を進めた。

3 授業の概要

（1） 4年総合的な学習の時間（人権教育、同和教育）について

① 授業者：小林　英子

② 単元名「生き方を求める（職業差別）」

資料名「走れ！緑のパッカー車」（出典：生きるⅡより改作）

③ 概要

単元のはじめに様々な仕事に対するイメージアンケートを実施した。その中で、「もの・場所をきれいにする仕事」としてごみ収集車の仕事を挙げ、イメージを聞いた。すると、ほとんどの児童は「くさい・大変・汚い・つらい」というマイナス的なイメージをもっていることが分かった。これは、「知らない（無知）」ということが児童に偏ったものの考えや疑念を抱かせ、そこから偏見や差別を呼ぶのではないかと考えた。そこで、本単元を通して、児童に「知ろうとすること」の大切さに気付かせたいと願い、「人との出会い」や「相手を知る」活動を重視した本題材を設定した。「人との出会い」や「相手を知る」活動の実際として、実際にごみ収集の仕事に就くゲストティーチャーに協力を得た。実際のごみ収集の仕事を体験したり、ゲストティーチャーとの触れ合い体験をしたりする活動を行うことで、仕事のやりがいや思いを知ることができた。

本時では、資料「緑のパッカー車」を読み、児童は職業差別に対する憤りをもった。そして、ゲストティーチャーと出会う前に児童の多くがもっていたマイナス的なイメージを振り返らせるために問い返しを行い、「仕事への内容や思い」を知らないことが差別を生むことに気付かせた。多くの児童が「相手を知ること」が差別をなくすために重要であるという思いをもった。

（2） 6年総合的な学習の時間（人権教育、同和教育）について

① 授業者：貝沼　拓弥

② 単元名「差別のない社会の担い手になる」

資料名「部落差別の解消に関する法律」（出典：新発田市立住吉小学校「わがごと」）

③ 概要

単元のはじめに児童へ差別についての意識調査を行った。「差別をなくしていこう」という気持ちが高いことが分かったが、「差別に出会ったとき、差別を止めることが

できない（自信がない)」と答えた児童が多いことも分かった。また、部落差別について「知っている」「聞いたことがある」と答えた児童は 24.3%であり、多くの児童が部落差別について詳しく知らないことも分かった。そこで、①「人権の歴史」、②「部落差別とたたかってきた人々の思い」、③「ゲストティーチャーから学ぶ部落差別の現実」という単元構成を設定した。

本時では、「部落差別の解消に関する法律」について考えさせることを通して、これまで学んできたことやゲストティーチャーの思いに立ち返らせ、「部落差別のない社会をつくるために、自分たちにできることは何か」を問うた。そして、児童はスケール図を用いて、それぞれの考えや思いを共有した。このように、対話的な学習を通して、児童は部落差別を無くしていくという意欲を高め、「家族など身近な人に部落差別の現状を伝えたい」「部落差別をなくすために啓発ポスターを作りたい」「人権学習を通して、もっと学びを深めていきたい」といった実践的な行動を具体的に考えることができた。

4 研究の成果

【参加者の感想から】

（1） 4 学年の授業

・聴き合う雰囲気が醸成されていて、それが何よりの人権教育、同和教育だと感じた。

・児童たちが緊張感のある中、差別に対して真剣に考えていた姿が素晴らしかった。

・日頃から児童との丁寧な対話を通して児童とよりよい人間関係、信頼関係を築いていることが伺えた。児童が「話す」、「聞く」、「考える」の切り替えができていてとても落ち着いた授業だった。安心して考える支持的風土があった。

（2） 6 学年の授業

・児童たちが「部落差別」という大きなテーマについて、一生懸命に話し合う姿が印象的だった。一人ひとりが声を出せるいい雰囲気のクラスで、温かい気持ちになった。

・6 年生の児童たちは、自らが実践できそうにないということも含めて、本音が見えたと思った。

・「じゃあ、これからの未来についてはどうする？」という発問の後、『差別の歴史をもっと知ったり、伝えたりしていきたい』という気付きがあり、大人も児童も学び続けることや学級の雰囲気の温かさが根底にあるからこそできる授業だと思った。

（３）全体を通して

・対話をしながら本音を出し合うのは分かるが、対話は手段であって、対話的な学習が目的ではないと思った。あくまで、良い対話を通して、差別への憤りを高めたり、解決のために行動に向かわせたりするのが目的ではないかと感じた。

【下越教育事務所学校支援第２課　指導主事　手島千香子様よりご指導】

・ゲストティーチャーとの出会いを大切にすることで、人や仕事の素晴らしさ（プラス的なイメージ）から授業に入っていった。

⇒新しい取組であった。

・過去の自分の考え（差別意識）に立ち返らせた。

⇒きれい事だけで終わらず、より自分事として捉えさせることができた。

【胎内市立黒川小学校　教諭　渡邊幸太様よりご指導】

・児童の「～したい！」という意欲を引き出す発問を行った。

⇒具体的な数値、児童の意識アンケート、ゲストティーチャーとの出会いは有効だった。

・児童の考えが落ち着いたときに、教師がどのように働きかけをするかが重要である。

・クリエイティブ・ラーニング（創造的思考）の重要性

本研究を通して、「単元構成・授業展開の工夫」、「主発問・問い返しの発問の工夫」の重要性に改めて気付くことができた。今後も、研究を続け、よりよい「単元構成・授業展開の工夫」、「主発問・問い返しの発問の工夫」を探っていく。

これからも、「人との出会い」を大切にすることで、児童が差別事象について自分事として捉え、課題と真剣に向き合えるように取り組んでいく。